

亞細亞の目ざめ

中 屋 教 海

吾々の夢は數世紀續いた。夢としては長く、悠久の前には單なる一つのエピソードである。十九世紀に於ける泰西文明、即科學文明は永き人類の歴史に於ける一つの挿話である。——我々が今立つてゐるキャピトリン丘は、嘗つては羅馬帝國の首都、諸王恐怖の處であつた。この世界は如何に變化し、如何に流轉して行くことであらう？——キャンピトリン丘上から廢都を眺めて、ポツギアスは斯く叫んだ。

第二のポツギアスが出でぬであらうか。新世界のキャピトリン丘から、倫敦を、巴里を。紐育を俯瞰して。世界の廢墟、變化を嘆んずる日が、再び吾々の世に來たらぬであらうか。

近代物質文明(科學文明)は百年もつゞいた。十九世紀はその全盛期であり、世紀末は文明末であつた。或る國では、物質文明は今やその絶頂を過ぎ、或る國では未だその絶頂にも達してゐない、無邪氣なる人類は、進化、改造の觀念によつて、物質文明の限りなき持續と向上とを期してゐる。短かきが文明の運命である。

「今や物質文明の世は日一日と不安定となり、そして、その終りは見えてゐる」とは「基督教社會學」の最終の一節である。今日は世界不安定の秋である。泰西文明の大伽藍が動搖して、その終末は窺はれてゐる。是即ち白人の世界が有る方面に於て退化停滯し、東洋が再び世界の舞臺に登つて來たことを示すものである。ジンギスカンの時の如く、東洋人が世界に覇權を掌握するといふのではない。私はいはんとすることは、東洋靈、亞細亞靈が復活して來たといふことなのだ。西洋知に對して亞細亞靈が、西洋的自由精神に對して亞細亞的自由靈魂が目ざめて來たといふのだ。然し勿論それは自由精神が尙ほ亡び盡くしたのではない。リツカアトはその「生命の哲學」の非難のうちでソクラテスの言葉を引きいた。曰く「最も深く思惟することが最も深く生くることであるのだ」と。私はそれに對して印度は今日まで最も深く考へられた思想をもつた民族であると云ひたい。

「東洋の二大民族」が、今日再び世界に於ける指導的精神とならんとしつゝある。世界の求むる所は歐羅巴の回生でもなく、歐羅巴の合理化でもない。世界靈が、古き亞細亞を再び求めてゐるのだ。

古き亞細亞へ還れ！ これ世界靈の叫である。基督教初期の歴史を讀め。羅馬の唯物主義は、神秘的、精神的東方文明のために、光を奪はれた。今日もまたその時である。「印度崇拜」の時が再び來た。亞細亞が世界を救ふの時再び來た。

シペングラアの「西洋の没落」を讀め——亞細亞靈が自ざめるの時が來たのだ。

亞細亞の西洋化ではない。西洋の亞細亞化である。西洋の知に對して、亞細亞の靈を呼びさますの時なのだ。物質文明を崇拜しつゝひたすらに泰西を模倣し、利己主義のうちに安息しつゝある人々よ、窓を開け！ 再び慈母の懷に還れ！ 古き亞細亞の人々よ、永き眠りから醒めよ。最も古くして最も新たな大亞細亞精神に還つて西洋物質文明に酔ひたる人類を救へ！

明るい世界へ

矢 谷 智 秀

明るい世界に住まう！ 明るい世界に住まう！ それは何んと言ふ氣持のよい言葉だらう。

視よ蒼々たる天日の下に、生きんとして息まざる草木を！

少さく路傍に虐げられた無名草でも、彼等は自己が生きてる限り斷へず、明るい世界へ／＼と伸びて行くではないか。此の生きんとする努力こそは、彼等の本性であり、亦彼等をして有終の美を全ふせしむる力そのものではないか。明るい世界へ住まう、それは凡てに靈長であらうとするものの誰れしもが求めて息まざる所のものであり、亦等しく求めなければならぬ世界である。